



# 幕末維新时期政治主体形成の史的特質－姫路藩を事例として－

前田, 結城

---

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2011-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5183

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005183>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 前田 結城  
博士の専攻分野の名称 博士（文学）  
学 位 記 番 号 博い第 5183 号  
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 1 項該当  
学位授与の日付 平成 23 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

幕末維新时期政治主体形成の史的特質－姫路藩を事例として－

審 査 委 員

主 査 教 授 奥村 弘  
教 授 林原 純生  
教 授 市澤 哲  
准教授 河島 真  
准教授 古市 晃

## 論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

幕末維新期政治主体形成の史的特質  
—姫路藩を事例として—

氏名 : 前田 結城

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 奥村 弘 教授  
(副) 市澤 哲 教授  
(副) 林原 純生 教授

(注) 4, 000字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

## ■序章 幕末維新史研究と政治主体形成論

幕末維新史研究において、維新の政治的主体の形成と展開について把握するという視角は、戦前の「講座派」の研究にはじまり、戦後にも受け継がれた。50年代から90年代にかけて、時代順に遠山茂樹、田中彰、芝原拓自、井上勝生の各氏がその主要な論者であった。四氏は、藩体制の絶対主義化を主導した改革派が幕府を打倒し絶対主義天皇制国家を創出したという維新変革像を共有しており、この「改革派」＝維新の政治的主体の形成過程に來たるべき近代天皇制国家の特質を見出そうとした。維新の政治的主体の形成について、遠山・田中・芝原氏は、下士が上士との抗争を通して政治的に活性化し、尊攘派、討幕派としての経験を積む中で絶対主義的官僚(政治家)として成長していくという議論を、また井上氏は、絶対主義的改革を進める能吏＝「有司」が藩士一般から自立し、維新政府の有司へと飛躍していくという議論を提示した。ただ、80年代以降は政局史の隆盛もあり、幕末維新期の政治主体形成論は、実質井上氏の段階でストップしている。

そこで本論文では、まず第1章において後世「尊攘派」「討幕派」と呼称されるような横断的・同志的な政治的結合(そうした結合に加わる主体)が形成される史的要因について再検討し、第2章では、前章で検討した要因により出現した諸主体が幕末中央政局で活動する際の特質、及び彼らの中から維新官僚が輩出されることの意味について検討する。また第3章では、幕末期に中央での政治活動を経験した政治的主体・政治的結合が、明治初年の藩体制を占めていくという事実を踏まえた上で、当該期の藩政の特質について検討する。遠山・田中氏は藩政改革派から維新官僚、井上氏は「有司」から維新官僚(維新政府の有司)への展開に専ら関心があったため、幕末中央政局で活動した家臣が藩体制に戻ってくる問題については検討がなされなかった。そして第4章。結論を先に言えば、本稿では「尊攘派」や「討幕派」などの党派概念を使用していない。その第一次的理由は、一次史料に基づいて検討した結果によるが、それではなぜ「尊攘派」などの概念はこれだけ一般的に定着しているのであろうか。換言すれば、この問題自体歴史的に検討されなければ、第1～3章で論じたことの説得力が十分に得られないと考える。

本稿は姫路藩を分析対象とする。同藩は名門譜代藩であり、幕末には藩主を最後の大家として輩出、維新時には新政府より「朝敵藩」扱いも受けた。つまり、遠山氏のシエマによれば同藩は旧体制側であり、単に打倒される対象でしかなかった。このような藩を題材に分析を行うことは、西南雄藩中心史観や尊攘派、討幕派中心史観を相対化することになりうると考える。

## ■第一章 近世後期姫路藩における同志的な家臣結合の形成と藩校

19世紀初頭の姫路藩では、財政再建と人材登用の一体的な推進が課題となっていた。この状況下で改革を主導したのは家老河合道臣である。また文化期における姫路藩の藩校改革＝「役人」資質改革は昌平黉改革の影響を受けており、河合による藩校教育改革策は19世紀初頭における統治身分の自己改革の全国的潮流に位置づいていた。

道臣主導下の藩校では学習活動が活性化していたが、そのことは家臣間に家格階層秩序と矛盾した結合関係を構築せしめた。学問・武芸を媒介として同志的な関係が作られていく可能性は19世紀初頭に限らず存在していたかも知れないが、当該期藩校の特徴は、藩主の権力的な後押しを受けた重臣層が低格層の家臣との人格的結合を促進していたことに

あった。その後、道臣は準藩校の仁寿山校を設立し、家臣の同質的な結集形態を人材育成の場に相応しいものとして合法化していこうとする動きも見せた。

道臣の死後、1830年代から50年代にかけては藩の海防・財政不安が続いた。こうした時勢の下、能力主義的な人材育成策を進める姫路藩は、藩外で学問・武芸修行の経験を蓄積し、その成果を藩に還元しようとする家臣のあり方を奨励し、また彼らに「役人」としての社会的地位を保障しようとする路線を明確にしていた。かような藩の政策下で自己形成を遂げた家臣が、当該期、のちに政治的連携関係に転化する人的関係を藩外人物と構築したのであった。

かくして、一部の大名家家臣にとって、学問武芸の知識・技能交流の場における同門関係・子弟関係を基礎とした人的結合関係に組み込まれることの意味が、主従制・家格階層制におけるそれと比して、自己形成上重要となってきたのである。

## ■第二章 藩内「有志中」的政治結合の形成と活動の特質

文久2～3年(1862～3)の中央政治社会において、家老・組頭など重臣層や藩校の指導者層、また学問・武芸で台頭し藩外人物との交流の経験を豊富に有する中・下士(扶持方給人クラス)が身分横断的に結合した藩内「有志中」的政治結合(この姫路藩における例を「河合一有志結合」と呼称)が成立した。元来、対外的な政治活動に参加し得なかった身分の家臣が、こうした政治集団に組み込まれ得たのは、河合道臣の養嗣子で仁寿山校の運営にも関与した河合屏山やその親類で物頭の河合惣兵衛などの重臣層がその結集核をなしていたためである。ただ、河合惣兵衛は自らが率いる政治的結合を「有志中」・「有志一統」、すなわちフラットな同志集団として捉えることで集団性を強化していた。ここでは、上士対下士、「有司」による有志(尊攘派)の利用という構図は認められない。

「河合一有志結合」の結合関係は身分制や「組」などの家臣編成原理とは矛盾していたが、彼らは幕府・藩権力の否定には向かわなかった。その活動内容は自藩を一個の政治勢力として成り立たせようとするものであり、その政治志向は反幕的ではなく、將軍の奉勅攘夷方針に諸藩を糾合しようとするものだった。よって、「幕藩体制の否定の論理」を有しているか否かは、藩内「有志中」的政治結合の成立自体とは無関係である。ただし、文久3年八・一八政変後、諸藩士・公家の横断的結合に対する幕府の規制が厳しくなると、姫路藩は幕閣譜代藩という性格上、「河合一有志結合」に弾圧を加えざるを得なくなった。

また、藩内「有志中」的政治結合は、主君を相対化し、藩権力を超越し得る資質を持った家臣が生まれやすい性格を有していた。姫路藩では武井守正などの維新官僚がその典型例であり、武士身分のかかる歴史的な性格は、その母体藩が西南雄藩・討幕藩であるということと、第一義的には関係なく形成され得るのであった。

## ■第三章 明治初年の姫路藩政の特質について

本章では、慶応4年(1868)から明治4年(1871)7月廃藩置県までの藩政の特質について、幕末政治過程を経験した政治主体が藩体制を占めていくことの意味に留意しつつ考察した。

姫路藩国元では、明治元年9～10月頃、(所領返上・徳川家臣従論)の江戸藩邸に対抗して、(本領安堵・家名存続論)を掲げた新体制が成立した。この政治体制は家老河合屏

山を指導者に戴き、酒井家家臣による姫路藩領統治体制を維持・強化することを第一の政策課題としていた。明治元年11・12月・同2年1月における姫路藩版籍奉還建白も、如上の政策の展開上に位置づくものであった。だが一方、同建白は府藩県三治一致の理念の急進化を内容とし、建白活動＝主君朝臣化活動の主体は、武井守正・近藤薫など、主君よりも執政河合屏山の命を重視する「河合一有志結合」であった。同建白は大名領主権の強化と身分制・主従制の相対化現象が同時進行する事態を集中的に表現するものであった。

明治2年6月の版籍奉還以後、姫路藩は府藩県三治一致政策に一貫して協調的な姿勢をとった。特に藩制公布(明治3年9月)後、姫路藩の政策は、主君の権威性や家格階層制秩序の一層の縮減を図り、大藩に相応しい制度的領域統治機構化を身分制下において最大限に展開させようとするものであった。かかる藩政を展開した時期の政治体制は、大参事河合屏山を筆頭に、幕末期「河合一有志結合」の一員として政治的投機に参画した家臣を要職に多く含んでいた。屏山主導下の姫路藩で藩官員となりうる最終的な資格は「正義」・「勤王」と政府に説明しうる酒井家「家臣」であった。しかし、彼らが自藩を播州の中央政庁＝制度的領域統治機構化を推進すればするほど、藩官僚の結合原理としての「酒井家」の意味は希薄化せざるを得なくなった。明治4年7月14日の廃藩置県を批判する論理は、少なくとも姫路藩からは提出されようもなかった。

## ■〈旧藩勤王派中心史観〉の成立と展開

幕末期における藩の動向を勤王対佐幕の構図で捉える見方は、明治初年、維新政府に対して、藩論が勤王論で一致していることの論理必然性を説明するために成立した。これは歴史観というより、現状認識としての〈勤王派中心御一新観〉と呼ぶべきものであった。

日清・日露戦後、史談会と宮内省を中心とした幕末維新史編纂において、薩長藩閥勢力偏重ではなく、その他諸藩勢力の維新への主体的な動向が重視されるようになった。そうした中、姫路など「佐幕藩」の見直しも図られた。当時の一般的な了解事項として、非歴史的・循環論的国体論との葛藤を生むような維新史叙述は行いえなかったが、この了解事項に抵触しない限りは、史学の方法に則った史料蒐集・史書編纂が可能であった。旧藩が王政復古・版籍奉還・廃藩置県に主体的に関与した歴史を、一定の史料の根拠を持たせて叙述しようとする動きがここに生じ、〈旧藩勤王派中心史観〉成立した。

明治後期に旧藩関係者(旧大名＝華族と旧家臣)の間で成立した〈旧藩勤王派中心史観〉が社会的に定着した要因は、姫路の事例によるなら、日露戦後に郷土史顕彰が行政課題化する中、官僚組織外に歴史文化を担う専門的社団としての史談会が成立(明治40年)し、これが〈旧藩勤王派中心史観〉の枠組みに則って精力的な史料発掘と史書編纂、そして維新史関連の史蹟顕彰を行ったことによる。戦後の藩史叙述は藩閥史談会の成果を踏まえざるをえず、それは今日においてもなお、『姫路市史』などの地域史・自治体史における旧藩の維新史叙述を規定づけている。

## ■補論一 書評 藤原龍雄『姫路城開城』／補論二 廃藩置県前後における姫路藩士族の動向

補論一では、明治元年姫路藩の新政府に対する降伏過程を跡づけた藤原龍雄『姫路城開城』(神戸新聞総合出版センター、2009年)の書評を行った。また補論二では、姫路藩士

族龜山雲平の古記録をもとに、明治初年における「河合一有志結合」への非協力的「役人」に対する報復措置の実態、及び一大家家家臣から地域社会の一職業人への転身の実態について基礎的な事実を確認した。

**■終章 幕末維新时期政治主体形成の史的特質**

遠山・田中・芝原・井上各氏の政治主体形成論は、いかに徳川封建体制が打倒され、天皇制絶対主義国家（有司専制政府）への一元的な権力集中が行われるかという枠組みに沿って論じられた。これは当該期の政治主体形成を、上士・下士対抗の激しさが大量の下士の政治的進出を規定するという量の問題で説く方法と密接に関連しており、また井上氏のように、幕末長州藩の中に後世の有司専制を読み込むという方法にも影響を及ぼした。

だが、本稿で明らかにした藩内「有志中」的政治結合の形成は、藩への利益還元を条件に、藩内外を問わない家臣間の相互交流や身分横断的な結合が体制的に容認されるといった、近世後期の大家社会の質の問題と関わって生起するものであった。これは、近世大家の身分的な人格結合の内部から身分的な人格的諸関係を相対化していく主体が出現する事態を示しているのであり、近世近代移行期における統治権力編成の変質をいかに論じるかということと関わる。が、本稿では政治主体形成論に主題を絞ったため、最後に挙げた問題は十分に論じきれなかった。今後の課題としたい。

**論文審査の結果の要旨**

氏名	前田 結城
論文題目	幕末維新时期政治主体形成の史的特質－姫路藩を事例として－
要 旨	
<p>戦後の明治維新研究における政治主体形成論は、いかに徳川封建体制が打倒され、天皇制絶対主義国家（有司専制政府）への一元的な権力集中が行われるかという枠組みに沿って論じられてきた。そこにおいて当該期の政治主体形成は、上級武士身分（上士）と下級武士身分（下士）との対抗の中で、大量の下級武士身分の政治的進出という視角から扱われ、さらにこのような政治進出を支えるシステムを、維新後の専制的な統治形態形成と関連して、政治指導者（有司）による下級武士尊攘派の利用と見る研究も生まれてきた。</p> <p>これに対して、前田結城は、姫路藩を事例として、第1に、19世紀に入り、近世大家の身分的な人格結合の内部から、上級家臣団と下級家臣団を貫く秩序が生まれ、身分的な人格的諸関係を相対化していく主体が「有志中」という名称で出現したこと、第2に、幕末の政治過程において、藩への利益還元を条件としながらも、他藩の家臣と相互交流すること及び、身分横断的な結合を取ることが藩運営において容認されていること、第3に、このような同志的結合が、藩主個人への臣従関係とは相対的に区別される明治維新後の藩政運営の基礎となったことを、緻密な史料分析から明らかにし、下級武士身分台頭論と異なる新たな歴史像を提示した。</p> <p>本論文は、研究史及び課題設定について述べた「序章」、四章からなる本論、全体のまとめである「終章」と、本論文の考察対象である姫路藩の維新时期に関する著作の書評及び人物についての小論を内容とする補論から構成されている。</p> <p>第1章「近世後期姫路藩における同志的な家臣結合の形成と藩校」では、維新以降に「尊攘派」「討幕派」と呼称されるような横断的・同志的な政治的結合について、そうした結合に加わる主体が出会う場である藩校を中心に分析を進めた。そしてそこから主従制・家格階層制と異なる、学問武芸の知識・技能交流の場における同門関係・子弟関係を基礎とした人的結合関係という新たな要素が、藩士の自己形成上重要となってきたことを指摘した。</p> <p>第2章「藩内『有志中』的政治結合の形成と活動の特質」では、第1章で検討した新たな諸主体が幕末中央政局で活動する際の特質、及び彼らの中から維新官僚が輩出されることの意味について検討を加えている。</p>	
主査記載 氏名・印	奥村 弘

ここでは、上士、下士を含む新たな政治的結合がフラットな同志集団という性格を有していることが明らかにされるとともに、そこには、幕府否定という行動原理は見られず、上士対下士もしくは、「有司」による下士有志結合（尊攘派）の利用という構図も認められないと指摘した。さらに藩内「有志中」的政治結合は、主君を相対化し、藩権力を超越し得る資質を持った家臣が生まれやすい性格を有しており、姫路藩では武井守正などの維新官僚がその典型例であると評価した。

第3章「明治初年の姫路藩政の特質について」では、幕末期に中央での政治活動を経験した政治的主体・政治的結合が、明治初年の藩体制を占めていくという事実を踏まえた上で、当該期の藩政の特質について検討している。そこでは同志的結合を前提とした運営が、藩主への個別的な臣従ではなく、藩の維持とその機構の官僚化という方向を導いた、と指摘した。

第4章「〈旧藩勤王派中心史観〉の成立と展開」は、姫路藩の幕末維新の主体的勢力がなぜ「尊攘派」と呼ばれるようになるのかを、明治以降の姫路の置かれた歴史的な位置と、そのなかでの地域社会における歴史認識の転換から明らかにしたものである。ここでは、日露戦後に郷土史顕彰が行政課題化する中、官僚組織外に歴史文化を担う専門的の団体としての史談会が成立（明治40年）し、この団体が「旧藩勤王派中心史観」の枠組みに則って精力的に史料発掘と史書編纂を進め、維新史関連の史蹟顕彰を行ったことが、その基本的な要因であると指摘した。

以上、本論文は、明らかにされた政治主体の形成が、維新时期の政治過程全体の中でどのような位置を占めるのかという課題を残しているものの、これまでほとんど分析がない譜代の大藩である姫路藩について緻密な実証を進め、それにより日本における近世近代移行期の政治過程について、従来の歴史的な理解に大きな変更を迫る歴史像を提示した点で、高く評価するものである。

以上の点から、本審査委員会は全員一致で、論文提出者前田結城が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

#### 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	奥村 弘
副査	教授	林原 純生
副査	教授	市澤 哲
副査	准教授	河島 真
副査	准教授	古市 晃